

研究

厚生經濟學史の一節

Otto Eferz と社會的爭鬪

手塚 壽 郎

—

一八八八年に、Otto Eferz は *Arbeit und Boden* と題する一書を著して、ドイツの各地の大學に學位請求論文として提出したが、それは何れの大學の受付くる所ともならなかつたのみならず、また多數の讀者を見出すことも出来なかつた。深き失望の感に打たれた Eferz は一八九三年、右の著述の *résumé* である *Katechismus der politischen Oekonomie* (Bonn) を公刊して、自らの所説に對する世人の注意を喚起せんと努めたが、世人は尙

之を顧みなかつた。ドイツの諸大學に於て受付けらるゝ Dissertation が如何なる出來榮えの業績であるかを知る私共は、*Les antagonismes économiques* の序文に於て Effertz が悲憤に滿ち充てる言辭を以てドイツ諸大學教授らの學問的良心を罵倒し去つてゐる態度(註一)を理解することが出来る。然しながら、Effertz は此らの事情に屈することなく、一八九七年、*Arbeit und Boden* を改版し、分冊となし、價格を驚くべき廉價となして、所説を世人に訴へた。(註二)だがこれも無益であつた。けれども奇しきは Effertz の運命である。獨逸學界に於て全く顧みられなかつた彼の著作は、佛蘭西に於て先づ現 Collège de France の教授 Charles Andler によつて、*“Le système d’Effertz est d’abord l’effort le plus vigoureux qui ait été tenté pour constituer une économie politique pure”* (註三)と最も高く評價せられ、次いで Adolphe Landry 代議士によつて甚だ高く評價せられると同時に、屢々論評の對象とせられてゐる。Landry の批評に従つて、修正すべきものを修正し、固執すべきものを固執しつゝ、一九〇六年、Effertz は佛文を以て *Les antagonismes économiques* を公刊してゐる。此公刊から既に二十六年の歲月が流れたに拘らず、今も尙 Effertz の所説は知らるゝこと多くはない。

(註一) Effertz, *Les antagonismes économiques*, Avant-propos, pp. 1—2; Effertz, *Le principe ponophysocratique*, p. 60.

(註二) Effertz, *Les antagonismes économiques*, Avant-propos, p. 4.

(註三) Ibid., Préface de Charles Andler, p. IV.

たゞ少數の專攻學者のみが彼の所説の學問的價值を充分に認むるに至つてゐるのであるが、少くとも彼の思

想は其著想に於ては甚だ重要なものであると思ふ。Landryの傑作 *L' utilité sociale de la propriété individuelle* は其オリヂンを *Arbeit und Boden* の讀書と其批判に發するものであり、又私の直觀的なる印象によれば、——證明は、他日これをなす機會を作るであらう——ピグーの *Wealth and Welfare*, 1912. の著想は Landry を通して Effertz にオリヂンをもつものであり、Loria の *I fondamenti scientifici della riforma economica*, 1922. はピグー、ランドリーを通して Effertz に其オリヂンをもつものゝ如くである。私の Effertz 研究は、従つて、厚生經濟學說史研究への一寄與をなさうことを目的とする。たゞし、こゝでの研究は、Effertz の所説の全面に組織的に觸れようとするのではなく、經濟に現はるゝ社會的争闘に就いての彼の所論と其批評とのみに關する。とは云へ、此解説と批判とは、彼の所説の全面的理解に充分に役立ち得るであらうと信ずる。けだし彼が *Interests sociologiques* の研究をなすこと多しとするも、それは社會的争闘の理解と規定への準備に他ならないからである。また彼が *Sociologie* の實踐に關する部分を取扱つてゐても、アンタゴニズムが生ずるのを如何にして防ぎ、又はアンタゴニズムの結果を變化するには如何様に干渉すべきかをしか、問題としてゐないからである。Effertz はアンタゴニズムの研究を、古代のドラマに於ける *catastrophe* に相應するものであると云ひ、*Interests* の研究を其 *intrigue* に、此ら利益の衝突に於て害せられたる利益に對して與ふべき保護を *dénouement* に相應すると云つてゐる。(註)而して *catastrophe*こそはドラマ中の *point culminant* であり、社會争闘の研究は社會學的研究の最高頂をなすのである。

(註) Effertz, Les antagonismes économiques, pp. 16—7.

ところで Antagonisme とは如何なるものであるのか。此問に答へんがためには、先づ利益と利益との間に存在する關係を考へて見なければならぬ。そこには調和的關係、即ち二つの利益が同一方向に變化する關係があり得る。また二つ利益が互に反對の方向に變化する關係があり得る。これが Antagonisme である。或學者は Antagonisme や Antinomie や Contradiction の間に何らの區別をなさないのであるが、此らの間には同一視すべからざる區別がある。Antinomie は、例へば二つの經濟量が反對の方向に變化する關係を表はすに止り、二つの利益が反對の方向に變化する關係を表はすとは限らない。相反的な關係をもつ二つの量が利益である場合にのみ、Antinomie は同時に Antagonisme であり得る。また Contradiction は思惟のうちのみあるのであつて、實在のうちにあるのではない。矛盾は人々の思惟のうちには現はれた confusion から生ずるものである。従つて矛盾は常に誤謬を含んでゐる。之に反し Antinomie も Antagonisme も實在のうちには存在する。(註)

(註) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 234.

Antagonisme は利益の間に存在する背反的關係であるから、社會的アンタゴニズムには、四つの觀點から區別をなすことが出來よう。

1. Les antagonismes entre les différents buts. (異なる種類の利益のアンタゴニズム)
2. Les antagonismes entre les intérêts vrais et putatifs. (眞實の利益と想像的の利益のアンタゴニズム)

3. Les antagonismes entre les differents sujets. (異なる人々又は主體の間の利益のアンタゴニズム)

4. Les antagonismes entre les differents temps. (異なる時間間の利益のアンタゴニズム) (註一)

だが Effertz が 'Arbeit und Boden' や 'Les antagonismes économiques' に於て問題としたのは、經濟的利益の背反であるから、彼の所説は自ら左の如きものに限られた。のみならず、ランドリーが注意して、'L'on est frappé de voir que, tandis qu'il est obligé de consacrer à l'étude des antagonismes de la productivité et de la rentabilité dans la société bourgeoise 80 pages, il lui suffit de 4 pages pour étudier ces mêmes conflits dans la société socialiste. (Arbeit und Boden, t. II, pp. 225—304 ; t. III, pp. 84—7.) Le seul antagonisme qui existe dans la société socialiste, c'est, pour lui, celui qui naît de la paresse des hommes.' (註二)と云つてゐるやうに、Effertz は經濟的アンタゴニズムの研究を、ブルジョア社會のそれに限つてゐる。

一、眞實の利益と想像的利益とのアンタゴニズム

二、現在の利益と將來の利益とのアンタゴニズム

三、個々の利益のアンタゴニズム

四、個人の利益と社會の利益とのアンタゴニズム (註三)

私はこゝでは此ら最後の二つのアンタゴニズムのみを、Effertz の説明のうちに見たいと思ふ。(註四)

(註一) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 235.

(註一) Landry, L'utilité sociale de la propriété individuelle, p. 460.

(註二) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 235.

(註四) Otto Effertz の學說はもとより、彼の生活事實も殆んど全く我國の學界に知られてゐない。歐米の學界に於ても同様である。こゝには、Charles Gide が Revue d'économie politique, 1922, pp. 85—8. に載せた Neurologie : Le professeur Otto Effertz, に據りて、彼の生活の概觀をなして置く。

彼は、ドイツ人を父とし、和蘭人を母とし、一八五六年 Dusseldorf に生れてゐる。醫學を修め、醫師となつた。絶えず世界の各地を旅行し、南アフリカ、メキシコに住み、メキシコでは五ヶ年を土人の小屋で過してゐる。此小屋の中での生活中に、數學上の問題を取扱つた Axiome und Aritome なる一書を著してゐる。歐洲大戰中は或和蘭の汽船會社の船醫となり、和蘭と蘭領 Guyane との間を屢々往復してゐた。たゞ Guadeloupe 島に寄港したとき、ドイツ人たる故を以て、捕虜として佛蘭西に送られ、初め Saint-Nazaire に、次に Guérande に、媾和の時まで約四ヶ年間監禁せられた。ガードとランドリー代議士の運動があつたに拘らず、何ら特別の便宜が與へられなかつた。監禁中にも、ラテン語を以て數學の小冊子の原稿を書き上げたと云ふ。

然し Effertz がなした研究の主たるものは、醫學でもなく、數學でもない。それは經濟學であつた。彼の ambition は經濟學の教授として大學の講壇に立ちたいことであつた。だが此野心は少しも満足せしめられなかつた。ドイツの諸大學の教授に浴せかけた罵詈雑言と批評とは、彼をしてドイツの諸大學に近づくを得せしめないやうにした。けれども、巴里大學の法學部は一九一二年自由講座を開いて、Effertz をして Ponophysiocratie を講ぜしめた。彼の喜びは大であつたであらう。一九二二年 Leyde 大學(和蘭)は、二二年から講義をなすべき許可を Effertz に與へた。かくて彼は永い間望んでゐた彼岸に達し得たわけであるが、不幸にも二二年の十一月永眠した。

これだけの生涯記を読むのみでも、Efferitzを *excentriques* の一人とすることに、何人も躊躇しないであらう。げに彼は、生涯中一度ならず二度までも、精神病院にまさに投ぜられんとしたことがあつた。恐らくこれは罵倒されたドイツ諸大學の教授達の陰謀の結果であつたと思はれる。それにしても、彼の精神的能力が傑れてゐたにも拘らず、平衡を保つてゐなかつたことだけは否定し難い。精神的能力に平衡を缺くことは、天才と相容れないことではない。ドイツの諸教授は Efferitz の學問的成果を *folie* と見てゐる他方に、フランスの少數の學者特に Andler と Landry とは、それを最も傑れた出來榮のものととしてゐる。

- Efferitz の經濟學的研究は下の如くである。
1. Arbeit und Boden. System der politischen Oekonomie. 1888. (Neue Ausg. Berlin, 1897.)
 2. Travail et terre. Paris, 1892. (Manuel abrégé de sa doctrine)
 3. Katechismus der politischen Oekonomie. Bonn, 1893.
 4. Les antagonismes économiques. Paris, 1906.
 5. Le principe ponophysocratique et son application à la question sociale. Paris, 1913.

二

人類社會に於ける争闘も極めて一般的なる現象であつて、絶えず學者の、特に哲學者らの注意をひき來つた。Hobbes の言葉 *Homo homini lupus*. は一般に認められてゐる。だが十九世紀に入りては、社會的争闘の問題は社會學者の第一次的關心問題となつて來た。此事實の主たる理由は、一方に於ては、生物學の進歩殊にダー

ウインの進化理論の出現にあるのであり、他方に於ては、或種の社會的争闘が著しく尖鋭化したこと、階級争闘理論の出現とにあるのである。

然しながら、階級争闘に就いて一般に行はれてゐる見解は何れも、争闘の概念を十分に明らかにすることなしに、作られてゐる。マルキシストの階級争闘觀は資本家と労働者との間の争闘を説くのであるが、彼らの説明だけを以てしては、此争闘の性質が少しも明らかになつてゐない。搾取する資本家と、此搾取から逃れんとする労働者の争闘と云つたゞけでは、此争闘の性質が明らかにされたとは云ひ得ない。又ブルジョア經濟學者は資本家と労働者との間の争闘の事實を否定するが、これは争闘者の一方が他方を滅却せねばならぬ争闘のみを争闘と考へてゐる結果に過ぎない。Effertz は此らの概念の混同やそれから生ずる所の不分明なる結果を絶たうとする。

此目的のためには、争闘を本質的に異なる二種類に區別するだけで充分であると Effertz は云ふ。其一は相手方の支配を目的とする争闘 *Luttes pour la domination* ; *Unterwerfungs- und Beherrschungskämpfe* であり、他の一は相手方の破壊を目的とする争闘 *Luttes pour la destruction* ; *Unterdrückungs- und Vernichtungskämpfe* である。(註一) 一般に或個人が他の個人と争闘状態にあるとき、此人は二つの異なる目的の何れかを追求してゐるものである。即ち相手方を支配し、搾取し、從屬的ならしむるか、一言に云へば相手方を降服せしむる *se faire céder* を目的とするか、それとも相手方を破壊し、滅亡せしむるを目的とするかである。此らの目的の觀點から Effertz

は争闘の本質的に異なる二種類を區別したのである。争闘は普通に抵抗を生ぜしむるものであるが、此抵抗をなす者もまた相手方の支配を目的とするか又はその破壊を目的とするかのほかに出でない。だから抵抗の争闘も、争闘の二種類の何れか一に屬するに過ぎない。(註二)

(註一) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 255; Arbeit und Boden, t. I, p. 239.

(註二) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 255.

單純なる争闘であると抵抗の争闘たるを問はず、對立する二人の争闘者の追求する目的は右の二つを出でないのであり、争闘には本質的には此らの二種類しかあり得ないのであるけれども、一つの争闘に於ける二人の對立者の夫々の目的を結合すれば、争闘に三つの場合があり得る。Symbiose, Concurrence, Parasitisme がこれである。

1. Symbiose; Verkehrskämpfe. 争闘者の各が相手方を支配しようとする場合
2. Concurrence; Konkurrenzkämpfe. 二人の争闘者の各が相手方を破壊し去らうとする場合
3. Parasitisme; Parasitismus. 争闘者の一方が相手方を支配しようとし、此相手方たる者が他方を支配しようとする場合(註)

(註) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 256; Arbeit und Boden, t. I, pp. 243—4.

一般に Concurrence は極めて似通つた對手の間に存在し、Parasitisme は極めて似通はざる對手の間に存在し、

Symbiose は著しく似通つてもゐないし、さればとて著しく似通つてゐない者でもない對手の間に行はれる。(註)

(註) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 256.

支配争闘と破壊争闘、symbioses と concurrence と parasitismes とは、ひとり人類社會にのみあるのではない。それらの區別はまた生物學に於ても重要な意義をもつ。此區別に據りて、私共は、生物の各種屬の間の關係を説明することも出来れば、また同じ種類に屬する個體の間の關係を説明することも出来る。例へば草食獸は植物のパラジットであつて、植物は草食獸の破壊を欲するのであり、従つて植物と草食獸との争闘は parasitisme である。また同一種屬に屬する個體は、無限に存在せざる食物を互に争ひ獲得する限りに於て、concurrence をなしてゐる。また此區別は同じ生物の細胞又は器官の間の關係をも説明することが出来る。例へば生理的器官の細胞の間の争闘は symbiose であり、雌雄を決定すべく胚に於て行はるゝ細胞間の争闘は concurrence であり、病的腫物と生理的器官との間の争闘は parasitisme である。

人と自然力又は他の生物との關係を考ふるもまた、同一の説明を下すことが出来る。人が電氣機械を建設する場合には、電力を人が支配してゐるのであり、避雷針を建設する場合には、電力を破壊してゐるのである。又我々は米や小麥を支配してゐるのであり、我々が耕作栽培する有用なる總ての植物を支配してゐるのである。之に反し、我々は雜草の如きを破壊してゐる。また我々は家畜を支配してゐるのであり、害蟲や猛獸の類を破壊してゐるのである。

人と人との争闘に於ても、Effertzの説明はよく妥當する。歐洲人が北部アメリカに於てアメリカ土人を驅逐した争闘は *concurrance* である。此破壊争闘に於ては、アメリカ土人は微力にして亡されたのである。歐洲人と熱帯地方の土人又はアフリカ土人との争闘は *Parasitisme* である。此争闘に於ても、土人は微力であつた。此故に彼らは滅亡はしなかつたが、搾取せらるゝ人々となり、事實上奴隸となつた。歐洲人と支那人との争闘は *symbiose* である。

Effertz はかゝる争闘の區別をなすことによつてのみ、各人種が經驗した奇異なる運命を説明することが出来ると考へる。北米に於て黒人は、氣候の不適當であるに拘らず、増加したが、アメリカ・インディアンは其郷土に於て亡びてゐる。生理的事實から此事實を説明することは出来ない。土人が黒人に比較し體力に於て劣つてゐないのは勿論、黒人こそ不馴れた氣候のために劣つてゐたと見られなければならぬ。それにも拘らず、黒人は歐洲人によつて亡されないのみでなく、却つて増加してゐる。反對に土人は全く亡びてゐる。これは、歐洲人と土人との間の争闘が *concurrance* であり、歐洲人と黒人との間の争闘が *Parasitisme* であると云ふことによつてしか、説明し得られない。(註)

(註) Effertz, *Les antagonismes économiques*, p. 259.

Effertz は此民族的又は人類學的争闘の説明から社會的争闘の説明に移るに先立つて、自らなした争闘の分類の獨創性を誇つてゐる。Effertz によれば、ダーウインは支配争闘と破壊争闘とを混同してゐる。ダーウインは

眞の生存競争と *metaphorique* な生存競争とを區別してゐるが、此區別は破壊争鬪と支配争鬪との區別に一致しない。ダーウインの區別は對手が死滅するか否かの事實のみを基礎としてゐる。ライオンと *antelope* (羚羊) との争鬪は、ダーウインによれば、眞の生存競争であるけれども、然し實は *parasitisme* に過ぎない。(註一) ライオンは羚羊の血を吸へば足るのであり、羚羊の滅亡は自己の滅亡を意味する。ライオンは一々の羚羊を死せしむることがあつても、羚羊を支配しようとしてゐるに過ぎない。(註二) また昆蟲を花に引き寄せようとする植物間の争鬪は、ダーウインによれば *metaphorique* の生存競争であるが、實は破壊争鬪である。Effertz は云つてゐる。「ダーウインニズムの老なる文献中に於て、我々の區別をほのめかしてある一句しか見出すことが出来ない。此一句は Häckel のうちにある。此句の中で Häckel は *Competition* (Wettbewerb) と *Dependance* (Abhängigkeit) とを區別してゐる。だが此句は *Sedes materiae* ではなく、極めて短く、其書物の他の部分では此區別は現はれてゐない。In *sedes materiae* では、著者は此區別を認めない。Häckel の學說の他の一切は此區別やダーウインニズムと相容れない。其證據を得んがためには、Häckel が民族の運命に就いて書いたものを読むに如くはない。彼の説明によれば、滅び行く民族は、比較的弱い民族であり、歐羅巴人に對抗して残つてゐるのは最も強い民族である。北アメリカの土人が亡びたのは、彼らが弱かつたからであり、アフリカに於て黒人が亡びないのは、彼らが氣候によりて保護せられてゐる最も強いからである。」(註三)

(註一) Effertz, *Les antagonismes économiques*, p. 260.

(註二) Ibid., p. 257.

(註三) Ibid., p. 260.

Effertz はかやうに自らの争闘觀の獨創性を誇つた後、社會的争闘を問題とするのであるが、それは、同一の社會に屬する個人が、社會的階級に屬する限りに於て、又は一定の經濟的行爲をなし、一定の職能を果す限りに於て、此ら個人の間に行はるゝ争闘である。Effertz はこゝでもまた彼の争闘觀が妥當すると主張するのであるが、其研究を經濟生活に關する社會的争闘に限つてゐる。

經濟生活に於ける争闘は云ふまでもなく富の獲得を目的とする争闘であらうが、富の獲得は概して對手の貧乏や死滅を條件として行はれるものである。而して對手の貧乏を條件とする富の獲得と死滅を條件とするそれとは、異なる二つの場合であつて、混同すべきではない。前の場合には、一方の貧乏が他方の繁榮を生ぜしめてゐるのであるけれども、其一方の死滅は他方の死滅とならざるを得ない。之に反し後の場合には、一方の死滅によりてのみ、他方は繁榮を見ることが出来る。Effertz は此區別を多數の例を以て示してゐる。大小工業又は大小商業が互に競争をなしてゐるが、それは互に對手を滅ぼさうとする *concurrency* をしてゐるのである。小商工業者が大商工業に對する課税を要求し、幾多の制限を要求してゐる場合に、此ら小商工業者が追求してゐる目的は、大商工業者の破壊であり、消滅である。これとは異り、資本家と企業との争闘は *concurrency* ではなくして、*parasitisme* である。労働者は資本家の滅亡を欲し、生産機關の所有者たらんことを欲する。然るに資

本家は労働者の滅亡を欲するのではなく、却つて此らの人々を必要とする。労働者は其存在を脅されて、資本家と争つてゐるのではない。解放を目的として争つてゐるのである。或人が云ふが如く、資本家と労働者との間に利益の調和はあり得ない。それがあつたとしても、労働者の窮乏状態と死滅の間に於てのみである。"De la misère jusqu'à la mort des exploités il y a harmonie entre l'exploiteur et l'exploité ; mais de la misère jusqu'à l'opulence il y a disharmonie." (註一) 高利貸と借手との關係も parasitisme である。貸手は借手を支配しようとするが、死滅せしめようとはしない。借手は貸手の滅亡を欲してゐる。(註二) 私は Effertz が擧げた多數の例のこれ以上の例を引用する必要はないであらうと思ふ。たゞ Effertz がなした争闘の區別を明瞭ならしむるために附言して置きたいのは、此區別と、争闘の結果が血腥きものとなるか否かとは全然無關係であることである。先にも引用して置いたやうに、生物の争闘に於てライオンは羚羊の血を吸ふて之を死に至らしむるのであるが、羚羊なくしてはライオンは生ることが出来ない。故に兩者の争闘は血腥きものではあるが、支配争闘であり symbiose であつて、破壊争闘又は concurrence ではないのである。人間社會にありて、食人は對手の死を生ぜしむるけれども、其争闘は支配争闘に過ぎぬし、商人間の競争は流血を見ることなしと雖、破壊争闘である。

(註一、二) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 262.

三

社會的争闘に就いての Effertz の所説の原理はこれだけに盡きる。進んで私は、此原理の complication を述べ

なければならぬ。此 complication は争闘の結果を轉化することがある事實によつて生ずる。此轉嫁の現象は今までの多くの社會學者によつて取扱はれなかつた。従つて此點に關する Effertz の理論は全く斬新である。(註一)

一) 社會的争闘に關して一般に論ぜられたものはダーウインの生存競争論を移入したに過ぎないのであり、争闘の轉嫁の如きは考へられなかつた。生物界には直接的争闘しかない。Luttes initiales は同時に Luttes directes である。社會にては、少くとも經濟上に於ては、異なる。或經濟的利益を得た者が其利益を他の者に讓渡せねばならぬ場合があり、又或損失を受けた者が他の者に之を轉嫁する場合がある。故に間接的なる經濟争闘がある。而してそれらは種々なる程度に於て間接であり得る。何となれば此轉嫁は幾回も行はれ得るからである。例へば或人が其競争者を排除し、排除せられたる者が又他の者の地位を奪つたとしたら、第一の人と第二の人との間には、直接的アンタゴニズムがあり、第二の人と第三の人との間には、間接的アンタゴニズムがある。工場主は銀行家によりて搾取せらるるとせば、労働者は間接に銀行家によつて搾取されてゐる。(註二) 此現象は右に云つたやうに社會學者によりて知られざりしは勿論、争闘の當事者によりても知らるゝことが少い。人は争闘の對手しか知らないものである。労働者は、企業者や雇主等自ら直接に對立する人、賃銀の條件や労働の條件を決定する人と争ふ。そして企業者の背後にあつて利益を得てゐる資本家を見逃してゐる場合が多い。然し乍ら、人の感情や行動を理解するのではなく、彼らの利益を理解しようと思へば、直接的アンタゴニズムのみならず、利益の轉嫁を考へ、此ら争闘の行はるゝ最後の結果を決定せねばならない。(註三)

(註一) Ad. Landry, Les luttes sociales d'après Otto Effertz, dans les Annales de l'Institut international de sociologie, t. XI, p. 520.

(註二) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 264.

(註三) Ibid., p. 265.

經濟に於ける爭鬭の最後の結果は、社會的階級又は個人の間に、勞働と消費財とが分たるゝ状態によつて示される。Effertzによれば、經濟生活の目的は財の消費によつて欲望を満足することにあるのであり、財の獲得は勞働を費すことによつて可能である。(註一)従つて財と勞働とは經濟生活の最後の要素であり、經濟に於ける社會的爭鬭は財と勞働の分配に關して行はれる。だから此爭鬭に於て對立する人は一方に消費者又は生産者であつて同時に消費者たる者であり、他方に消費者又は生産者であつて同時に消費者たる者である。而して總ての人は此らの何れかに屬せざる者はない。故に人々は自己の生産物を消費する人又は自己が消費する財を生産する人と爭鬭を續けてゐる。前者に對しては成るべく少額を與へようとし、對手たる消費者はなるべく多くを得ようとする。後者に對しては反對のことが行はれる。勞働によつて作られずして自然の産物たる少數の財に關しては、人々は之を消費しようとして爭鬭する。だから經濟的爭鬭は、結局に於て、消費財を獲得せんとする爭鬭である。概括論をなす場合には、勞働の分配に關する爭鬭を看過することが出来る。人々の想像に反して勞働の分配は比較的に差異の少いものである。(註二)

(註一) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 64.

(註二) Landry, Les luttes sociales d'après Otto Effertz, dans les Annales de l'Institut international de sociologie, t. XI, p.

523.

經濟的争闘の最後の結果は消費財の獲得に現はれると云ふ場合に、各個人が他の人から自ら消費すると同じ財を奪ふと云ふ意味ではない。其財の代りに生産せられ得べき財を奪ふことにもなり得るのである。ところでもし總ての生産が互に轉換 transferer 出来るものであるとしたら、即ち生産財を如何なる種類の財の生産にも轉向出来るとしたら、消費財の奪ひ合ひは、消費財の量だけの問題とならう。

一般に生産の種類の轉向は何らの障碍を受けてゐないやうに信ぜられてゐるけれども、事實に於て、生産は自由に轉向し得られるものではない。我々が有する生産手段はあらゆる財を生産し得るものではない。Effertzは生産の二大要素として土地と労働とを區別することによりて、先づ此生産の種類の轉向が無條件に自由であり得ないのを證明する。Effertzに據れば、大多數の財は労働と共に土地を必要とする。けれども或財は多大の労働を要し、僅小の土地しか必要としない。反對に或財は多くの土地と僅小の労働を必要とする。だから或財の代りに、他の財を生産し得るには、此らの財に於て、労働と土地とが含まるゝ割合が、相等しくなければならぬ。簡明を期するため、Effertzは、總ての財を、比較的によくの労働を必要とする財と、比較的によくの土地を要する財とに分類する。而して此らの各種類の財のうちでは、財の種類が自由に轉換せられ得ると假定してゐる。(註一) 比較的によく労働を要する財は奢侈品であり、美的又は智的欲望を充足すべき財である。之に

反し主として土地を必要とする財は食物の如く、我々の生活を支持するに必要缺くべからざる財である。

Effertz の用語を用ふれば、第一類の財は *biens de culture* ; *Culturmittel* に相應する財であり、第二類の財は *biens de nourriture* ; *Nahrungsmittel* に相應する財である。(註二)

(註一) Effertz, *Les antagonismes économiques*, pp. 84, 89.

(註二) *Ibid.*, p. 90 ; *Arbeit und Boden*, p. 91.

此分類から Effertz は簡単に結論を導く。我々が第一類の財を消費する場合には、我々は他人の便利品を奪ひ、智的完成を妨害することゝならう。第二類の財を消費すれば、我々は他人の食物を奪ふことゝなるのである。例へば多くの労働を要したる高價なる寶石や美術品裝飾品を着飾る貴婦人は、他人から、同量の労働によりて作り得る文化財を奪ふものである。之と異り、狩獵地を構へ、庭園を造る者は、人の存在を犠牲にするものである。なぜならかくなすことによりて、食物を生産し得べき土地を利用することゝなるからである。小犬が一人の小兒分の食物を食し、一頭の馬が三人分の食物を食ふことが事實とすれば、犬の病院を建つる *Villie James* は天使の食はせ者であらうし、厩舎をもつ者は殺人者であらう。(註一)こゝで私は再び Effertz に於ける破壊争鬪と支配争鬪との區別に歸る。此區別は經濟的直接的アンタゴニズムに止まらない。アンタゴニズムの轉嫁の後に残る最後のアンタゴニズムである消費財をめぐる争鬪のうちにも、同じ區別が認められる。主として労働を必要とした財を消費する場合には、人は他人を支配すると云はれねばならぬし、土地を多く含む

財を消費する場合には、人は他人を破壊すると云はれねばならぬ。(註二)

(註一) Effertz, *Les antagonismes économiques*, p. 286.

(註二) *Ibid.*, p. 277.

個々人の利益のアンタゴニズムに就いての Effertz の所説は、其敘述が可成り錯雜してゐるのであるが、それをシェーマ化して見ると、右の解説に盡くるであらうと思ふ。Effertz は此原理を或ひは貿易政策に、(註一)或ひは社會的争鬭の對策に應用して、興味ある結果を出してゐる。一例を擧げよう。Effertz によると、労働を多く含む所の生産物の消費は階級により頗る差異のあるものであるが、土地を多く含む生産物の消費には著しい差異のないものである。(註二)「富める者は、貧乏人に比し、恐らくより多くの労働と土地とを消費するであらう。然し消費さるゝ労働が貧乏と共に減少する法則は、消費さるゝ土地が貧乏と共に減少する法則と同一ではない。土地の消費の分配の法則は労働の消費の分配の法則とは全く異なる。消費財の分配が只一つの法則によつて支配されてゐると信じたのは、分配論者の大誤謬である。……収入が減ると、資本家は食物の消費を減じ始めるが、文化財、奢侈品の消費を變化しようとしなない。食物から成る消費部分が或一定の小額まで減じた場合に、初めて、文化財奢侈財の消費を減じようとして決心する。また収入が増加すると、資本家は先づ其贅澤を増加しようとするものであり、食物の増加は其後にしか考へられない。……資本家の消費豫算の原理は intellectualisme でなければ、sybarisme でもない。それは虚榮心であり、他人よりより貧乏なりと見らるゝこと

に對する恐怖であり、ブウルヂョア社會に於ける其地位と尊嚴を維持せんとする熱望である。……此熱望を實現するためになさるゝ犠牲は、消費が家庭の内部に於て行はるゝ財に向けられる。奢侈は最後にしか犠牲にせられない。……労働者の心理は資本家のそれと正反對である。労働者の収入が減ずると、文化財から成る消費部分を減じ始め、食物の消費に變化なからしめようとする。労働者の収入が増加すると、最初に起る考はよりよい物を食ふことであり、小なる奢侈の増加は其後にしか考へられない。」(註三)また資本家が庭園を造り、狩獵をなすために消費する土地は多くはない。従つて如何なる社會組織が成立しても、労働者をして文化財のより多くを消費せしめ得るだけで、食物の消費は殆んど變化しないであらう。(註四)

(註一) Efferz, Arbeit und Boden, t. I, pp. 179—183.

(註二) Efferz, Les antagonismes économiques, p. 36r.

(註三) Ibid., pp. 334—9.

(註四) Ibid., p. 36r.

此最後の演繹は餘りに rapide であつて、問題とするに足らぬであらうし、また經濟的爭鬪のうちにも支配争鬪と破壊争鬪との區別を導き入れたことは、妥當にして且つオリヂナルな著想として、問題とせらるべき餘地はないであらう。従つて個人の利益のアンタゴニズムに就いての Efferz の所説のうちでは、生産の要素が土地と労働であり、生産せられた財は一定の比例に於て此ら二つの要素を含んでゐると云ふ點と、此同じ比例を

有する財のうちでは生産の轉換が自由に行はれると云ふ點であらう。

前者の點に就いて、極めて辛辣なる批評を加へてゐるのはパレットである。「著者は大發見をなした。二大發見をなしたと云ふべきであらう。なぜなら、第一に、經濟財を生産するには土地を要することを認識したし、第二に——これが主たる發見である——財が二つの要素労働と土地を含んでゐると云ふ彼以前の何人も解しなかつたことを知つたからである。余はこの批評をなさない。財が土地を含むと云ふことの意味の何たるかを知らぬからである。」(註一)パレットの批評の意味は、Effertz が強調する財に於ける労働と土地の割合なる概念の經濟上から無意味を嘲笑するにあるが如くである。「Il feint d'ignorer la complication du problème économique.」なる句を、右と同一趣旨の批評の後に加へてゐるのから考へて、(註二)財が労働と土地から生産せられてゐるのをパレットが否定してゐるのでないことは明らかである。従つてパレットの Effertz に對する理解は皮相的であると云はれねばならぬ。パレットは、Effertz が *Chrematistique* として極力排斥してゐる所の經濟學の立脚點を離れてゐないがために、財が一定の土地を含むと云ふ概念を理解し得ないのである。Effertz は價格現象と云ふが如き云はゞ附帶現象の研究に終らうとしてゐるのではない。價格現象を通して、個人と個人との間に行はるゝ財の分配の最後の結果を問題としてゐる。此立場からは、財の物量のみが窮局の問題となるのであり、此財の物量を作り出す所の労働と土地とが問題となるのである。こゝでは厚生經濟學の正確なる概念規定をなさず、また Effertz の經濟概念を明らかにせず、それらを他日の研究に残すのであるが、大體に於て Effertz は厚生經濟

學の立場に立つて、antagonismes économiques の研究をなしてゐると云ふことが出來よう。(註三) だが經濟的爭鬪の最後の厚生經濟學的結果が如何なる經過を経て交換經濟から出て來るのであるかの分析は、Effertz によつて殆んどなされてゐない。Landry もまたこれを認めてゐる。(註四) パレットが、「Effertz は複雑な様相を知らな

し」と云つたのも、此理由で出てゐるのであらう。

(註一) V. Pareto, Les antagonismes économiques de M. Effertz, dans le Mouvement socialiste, 1907, août-sept., p. 177.

(註二) Ibid., p. 175.

(註三) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 64.

(註四) Landry, Une théorie négligée : De l'influence de la direction de la demande sur la productivité du travail, etc, dans la Revue d'écon. politique, 1910, p. 747.

第二に問題となるべき點即ち生産物の種類の轉換は、生産せらるゝ財に含まるゝ労働と土地の割合が同一である場合に限りて行はれるとの主張は、一つの問題を正確に提出したと云ふ意味に於て甚だ重要である。(註一) 正面から此問題を提出した者は、Effertz を以て最初とするかも知れない。利潤率均等化の障碍研究の途中に此問題が間接に提出せられたことがあつたにしても、獨立の問題としてこれを提出した者、特に厚生經濟學の觀點から之を提出した者は、彼以前にはないであらう。Fraccareta が評して、「食物即ち労働と土地の割合の小なる財の生産が他の食物の生産に轉換し得らるゝことを許容しても、技術的可能が斷定せられたゞけで、少しも經濟問題を解いたことにはならない。一般生活に於ては、果樹園が牧草地に變化し得られることを、何人も

否定しない。だがこれは經濟問題ではない」(註二)と云つてゐるのは、此問題に對する Effetz の觀點を見誤つたためである。但し Effetz が此問題に正しい解決を與へたかは疑はしい。たとひ、生産せらるゝ財に含まるゝ労働と土地の割合が異つてゐるとしても、一財の生産に用ひられた労働と土地との全體を他の財の生産に費し盡さうとしない限り、又は此らの要素が絶對的に増減せられ得ない場合でない限り、生産せらるゝ財の種類は不可能ではない。Effetz は土地の面積と生産力とが其極限に達してゐることを假定してゐるのであるが、パレットが云つてゐるやうに、此假定は必然的ではないであらう。(註三)

(註一) Fraccacreta, La trasformazione degli impieghi di intrapresa, p. 50.

(註二) Ibid., p. 49.

(註三) Pareto, *l'* article cité, p. 176.

四

右に極めてシエーマ的に解説批評した個々人の經濟的利益のアンタゴニズムに關する所説は、問題を正確に提出したと云ふ意味に於て、我々の注意を要求し得べき重要なものであるが、社會の經濟的利益と個人の經濟的利益のアンタゴニズムに關する彼の所説は一層重要なるものである。ランドリーやピグーの先驅をなしたる點も實にこゝにある。プウルヂョア社會に於ける此アンタゴニズムを説ける者は彼が最初ではない。シスモン

ヂがあり、クルノーがあり、Rodbertus があり、Dühring があつた。(註一)然し、「個人と社會とのアンタゴニズムの問題を初めて提出したと云ふ榮譽は Effertz が受くべきではなからうが、深く且つ徹底的に此問題を取扱つたと云ふ榮譽は彼に屬する。」(註二)「私が引用し又は暗示した著者(Rodbertus, Dühring, Proudhon, Hertzka 等)は、私有財産制度のうちで受くる一般の利益の損傷問題に就いて、斷片的見解しか表明してゐない。此問題を充分に且つ組織的に取扱ふことを企てた最初の經濟學者は Effertz である。彼が生産力性と収益力性との間のアンタゴニズムに就いてなした研究は、恐らくは、彼の著書中の最も傑れた部分を成してゐるであらう。」(註三)

(註一) Landry, L' utilité sociale de la propriété individuelle, Avant-propos, p. IX.

(註二) Landry, Un économiste méconnu, dans la Revue d' économie politique, 1906, p. 613.

(註三) Landry, Manuel d' économique, p. 769.

Effertz は此問題を生産力性 Productivité と収益力性 Rentabilité とのアンタゴニズムの問題として提出する。此形態をとれる問題と、人と人との間の經濟的争鬭の支配性又は破壊性の問題との關聯は、私の知り得る限りに於て、Effertz によりて明らかにせられてゐないやうである。こゝでは此關聯の問題に論及することなく、Effertz における生産力性と収益力性とのアンタゴニズムを、獨立に、明らかにしよう。

先づ私は Effertz に於ける生産力性と収益力性の概念を明瞭にしなければならぬ。生産の最後の目的は、彼

によれば、使用價值を作り出すことにあり、之を作り出すには労働と土地とを必要とする。作り出さるゝ使用價值を w とし、この生産をなすに要する労働と土地とを夫々 a 、 b とすれば、此労働と土地との生産力(性の程度) p は、

$$p = w : (a + b)$$

である。(註一)此生産力性は人と自然との間に行はるゝ財の acquisition に於て現はれる。之に反し収益力性は財の如何なる acquisition にもあり得るのである。(註二)それには、Rentabilité vraie と Rentabilité putative とがある。前者は眞實純収入と眞實費用の差、即ち得らるゝ使用價值と費されたる労働費用の差である。後者は貨幣にて表はされた名目純収入と貨幣にて表はされた名目費用との差である。(註三)人は此差即ち名目的純利益を以て消費財を購ふことも出来、借り入るゝことも出来る。(註四)此消費財こそ、人の眞實の収入であるにも拘らず、此理由によりて名目的収入の獲得を經濟生活の目的としてゐるのである。けれども眞の經濟的利益は、如何なる組織の社會に於ても、特に社會全體から見る場合には、眞實總所得と眞實費用の差の最大即ち眞實純収入の最大に等しいものである。(註五)労働及び土地の一單位——Efferz は眞實費用を労働費用のみに限つてゐながら、生産力性の定義を下す場合には、異なる眞實費用の概念をもつてゐる——當りの眞實所得を生産力性を以て表はせば、人の特に社會の經濟的利益は此生産力性によつても表はされ得ると考ふことが出来る。Efferz は此生産力性と収益力性の間に背反的關係があるか否かを尋ねて、社會の經濟的利益と個人の經濟

的利益との間に背反的關係があるか否かを明らかにする。

(註一) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 81.

(註二) Ibid., p. 163.

(註三) Ibid., p. 165; Arbeit und Boden, t. II, p. 230.

(註四) Ibid., p. 158.

(註五) Ibid., p. 162.

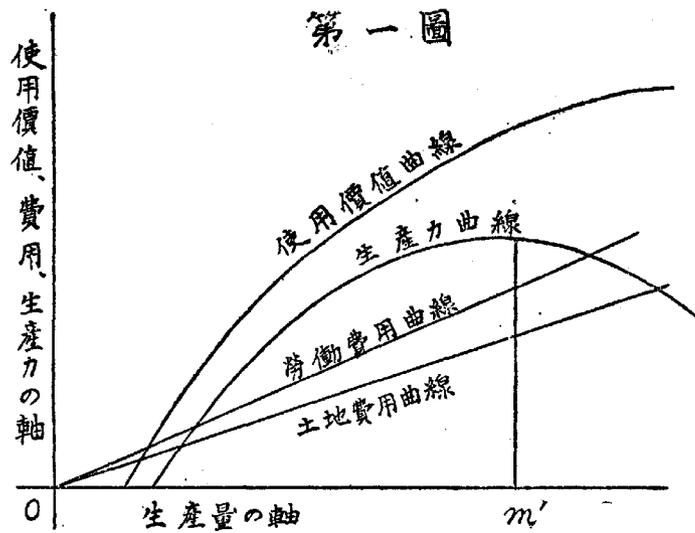
此目的のためには、Effertz は同じ座標上に生産力性の曲線と収益力性の曲線とを畫き、兩者の間に調和的關係があるか否かを檢する。だが彼が横軸上にとりたる値は生産物の量であるから、此量と生産力性との關係が如何にあるかを見ねばならぬ。先づ生産物の量を多く得ようとすれば、土地と労働とのより多くを費さねばならぬ。所で土地費用は一般に生産物の量に比例するに反し、労働費用は生産物の量よりより、少く増加する。蓋し生産量の増大は分業と cooperation とを可能ならしめ、生産物一單位當りの労働費用は分業によりて減少するからである。然し労働の主觀的苦痛は労働の客觀的量に對し乘數を以て増加する。故に労働費用曲線は不規則的形狀を示し、當初の増加は小にして、後に比較的によく増加する。(註一) 土地費用は生産量に比例するが故に、其曲線は横軸に與へられたる角をなす直線をなす。(註二) また生産せられた財量の使用價值は Daniel Bernoulli の價值法則に従つて遞減し行くものであると Effertz は認めて、其曲線は courbe logarithmique とせられてゐる。「これだけを與へられたものとして、生産量の軸(横軸)の上方に(縦軸に)生産力の曲線を畫く

ことが出来る。此曲線は第一の曲線（使用價值曲線を指す）から、後の二曲線（土地費用曲線及び労働費用曲線）の合計を引き去ることにより得られる。そこで、生産量の軸上に立てられた生産力の曲線は、上向部分と下向部分とから成り、此らの部分を分つ最高頂點を有する曲線を示すと云ふ結果が出て来る。」（註三）これによつて見ると、Effertzはこゝでは生産力性 Productivité の概念を變化して、生産量の總使用價值から土地費用と労働費用を控除せる殘額を生産力性としてゐるのである。彼は Arbeit und Boden の第一卷一一六頁以下に Höhe der Produktivität と Grösse der Produktivität とを區別してゐるが、こゝでの生産力性は後者を意味してゐる。先に定めた記號を以て示せば、それは

$$w - (a + b)$$

である。此らの生産力曲線、使用價值曲線、土地費用曲線、労働費用曲線と生産量との間には、第一圖に示すが如き關係がある。m'點は、生産力性を最大ならしむべき生産量 Q_m を示してゐる。従つて他の

生産量は生産力性を小ならしめざるを得ない。（註四）



第一圖

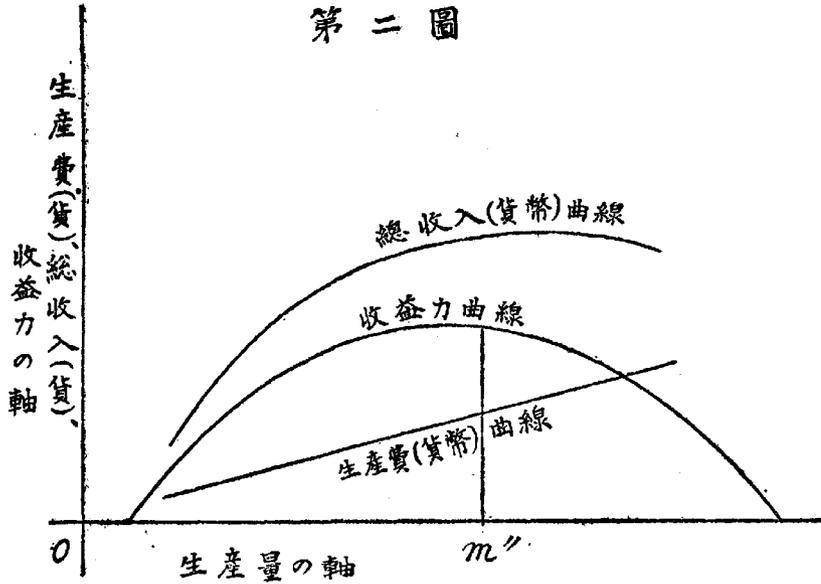
（註一） Effertz, Arbeit und Boden, t. I, p. 146.

(註一) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 119.

(註二) Ibid., p. 120.

(註三) Ibid., p. 120; Arbeit und Boden, t. I, p. 140.

第二圖



次に生産量と収益力性との間に關係があるかを見る必要がある。之を見るには、生産量を横座標とする収益力曲線を描くのが便利である。収益力は貨幣にて表はされた總収入と生産費の差であるから、収益力曲線を得るためには、先づ此ら二曲線を書かねばならぬ。元來價格の曲線は遞下曲線であつて、量の軸に漸近線をなすものであるから、生産量の總収入曲線は、上向する部分と下向する部分とより成り、此らの間に最高點を有する曲線から成るものである。(註一) 生産費曲線は上向する部分のみから成り、其傾きは次第に減じて、生産量の軸と一定の角をなす直線となるのである。故に此ら曲線の差である収益力曲線は上向部分と下向部分とを有し、之を最高點が分つてゐるのである。(註二) 第二圖は、生産量の軸を横座標とした總収入曲線、収益力曲線、生産費

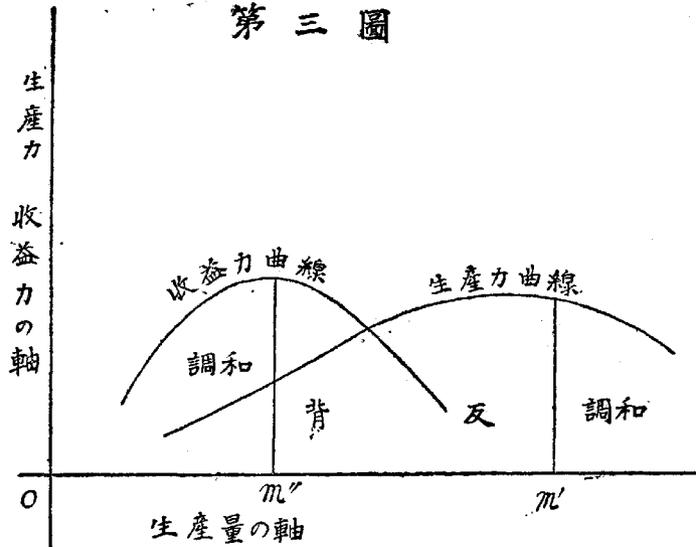
曲線を示す。 m'' 點は、収益を最大ならしむる生産量 om'' を示す點である。

(註一) Effertz, Les antagonismes économiques, pp. 188 et 216.

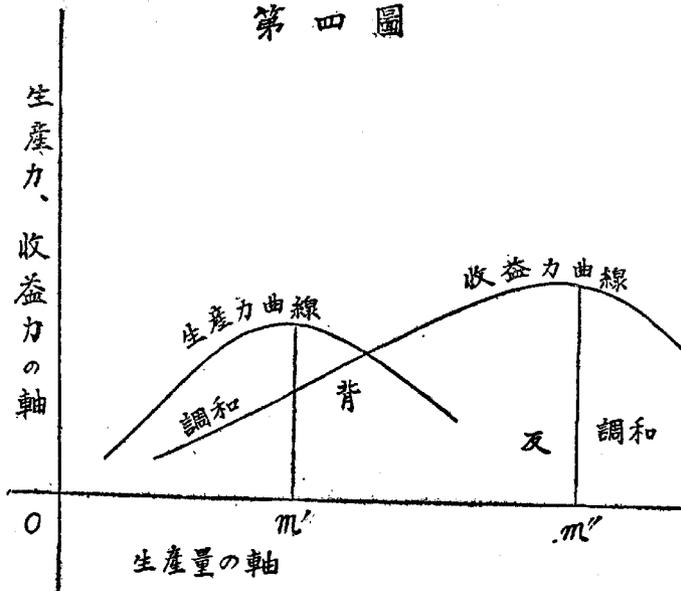
(註二) Ibid., p. 216; Arbeit und Boden, t. II, pp. 232—3.

今、かやうにして得られた生産力曲線と収益力曲線とを、同一の生産量の軸の上方に畫くならば、我々は、

第三圖



第四圖



ら見て生産過少があり、それが此點を超ゆれば、生産の過剰がある。又生産量が m' に達せざれば、生産力性が m'' に達せざれば、収益力性が

生産力性と収益力性との間にアンタゴニズムがあるか否かを、此ら曲線の比較によつて容易に知ることが出来る。 m'' 點は収益力性から見て生産の理想的なる最大量を示し、 m' 點は生産力性から見た生産の理想的なる最大量を示す。生産量が m'' に達せざれば、収益力性が

ら見て生産過少があり、それが此點を超ゆれば、生産過剰がある。そこでもし m' 點と m'' とが相一致すれば、個人々の収益力性から見ても、社會の生産力性から見ても、 $om'' \parallel om'$ なる生産量は理想的であり、其らの間に何らの背反もない。之に反し、第三圖に示されたるが如く、収益力性から見た最大生産量が om'' であるにも拘らず、生産力曲線から見た最大生産量が om' であつて、 $om'' \wedge om'$ である場合には、社會の經濟的利益と個人の經濟的利益の間にアンタゴニズムがある。たゞ生産量 om'' までに於てのみ、此アンタゴニズムがない。又第四圖に示されたるが如く、 $om' \wedge om''$ なる場合にも、此ら利益のアンタゴニズムがある。たゞ om' までに於てのみ、此アンタゴニズムがない。(註)

(註) Effertz, Les antagonismes économiques, pp. 381-2.

Effertz は、かく理論的に二つの利益のアンタゴニズムを證明した後、其實在性を證明する。生産量が収益力性から見て最大又はそれ以上であるけれども、社會から即ち生産力性から見て最大に達してゐない簡單な例は、穀物が著しく豊作なる場合に見られる。或ひは又此豊作なる穀物の一部を、個人が市價を高からしむるため、投棄する場合 (Dardanariat) に見られる。社會的利益から見て既に生産量が最大を超えてゐながら、収益力性から見て最大量が達してゐない場合に就いては、Effertz は飲用酒類に見ることが出来ることと云つてゐる。(註) このほかには例を擧げてゐない。

(註) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 383.

これだけの解説ではあるが、それで、個人の經濟的利益と社會のそれとのアンタゴニズムに關し Effertz が

説いてゐる所のものゝ骨子を明らかにし得た積りである。此所説の詳細なる解説と批評とを、私は他日に期したい。だがこれだけの骨子のうちにも、尙見逃すことの出来ない幾多の誤が藏せられてゐることを否定出来ない。ことに其主なるもの一つだけを擧げよう。

今、生産力性の概念をとつて見よう。Les antagonismes économiques に於ては、 w を生産せらるゝ財の使用價値とし、 a を労働費用、 b を土地費用とし、 $w : (a + b)$ を以て生産力性を表はしてゐる。それはまた productivité technique, degré ou taux de la productivité と呼ばれてゐる。(註一)此ほかに Productivité économique なる概念が後に導き入れられてゐる。それには次の内容が興へられてゐる。“Une production peut réussir plus ou moins bien. Nous appellerons la grandeur de cette réussite la productivité économique, ou simplement la productivité. On demande quelle est la formule, la loi de cette productivité? La productivité économique est égale à la différence entre la valeur d'usage des produits et leurs coûts de production, en tenant compte de la durée de la production. Les coûts de production se composent de coûts en travail et de coûts en terre. Appelons la valeur d'usage de la totalité des produits d'une production W , leur coût en travail A , leur coût en terre B , la durée de la production t , alors nous avons la formule suivante :

$$\text{productivité économique} = [W - (A + B)] : t.$$

W est le produit brut ;

$A + B$ est le coût ;

$W - (A + B)$ est le produit net.

Il y a donc une difference entre le productivité et le produit net d' une production. La productivité est égale au produit net divisé par la durée de la production.” (註二) 私の理解に誤なしとすれば、先の記號法で此經濟的生産力性を表はせば、

$$[w - (a+b)] : t$$

となる。此生産力性の概念は、先の生産力曲線に表はるゝ生産力性とも異ると考へられねばならぬ。これは單に

$$w - (a+b)$$

であるに過ぎない。収益力性と生産力性を比較して、Effertz の目的とする所を達せんがためには、此最後の概念のみがあれば足るのである。Arbeit und Boden とは、Höhe der Produktivität と Grösse der Produktivität とが區別せられ、

$$\text{Höhe der Produktivität} = \frac{w}{a+b}$$

$$\text{Grösse der Produktivität} = w - (a+b)$$

とせられてゐる。(註三)そして生産力性曲線は生産力性の大きいさの曲線を示してゐる。此簡明なるに如くはなしである。

(註一) Effertz, Les antagonismes économiques, p. 81.

(註二) Ibid., pp. 92—3.

(註三) Effertz, Arbeit und Boden, t. I, p. 117.

だが $w := (a+b)$; $w - (a+b)$ は何を表はしてゐるのであらうか。 w は利用であり、 a は労働量であり、 b は土地の面積なのであるが、(註一) $w := (a+b)$ は如何なるものを表はし得るだらうか。 Effertz は、 Arbeit und Boden の第一卷一一八頁に於て、及び Les antagonismes économiques の八二頁に於て、農産物の場合には労働費用を抽象して、生産力性を $\Sigma \cdot \rho$ を以て表はし、工業生産物の場合にはそれを $\Sigma \cdot \mu$ を以て表はすと云つてゐるが、此らの意味は理解するに難くはない。けれども a と b との間に換算の橋なくしては、 $w := (a+b)$ なるものには、何らの意味も付することが出来ない。これは Effertz の幼稚なる誤であつて、私の理解が幼稚なのでないことは、私の此批評と同じ批評を Landry がなしてゐるのに徴して明瞭である。(註二) Effertz の此概念の無稽は、此概念と並べて、 $\Sigma - (a+b)$ を導き入るゝことによりて、一層其甚しさを加へてゐる。 a と b とが、利用から控除し得らるゝ量であるがためには、 a は労働量であつてはならぬし、 b は土地量であつてはならぬ。負の w でなければならぬ。労働は負の利用であるとは、強いて考へ得られないこともなからうが、土地が負の利用であるとは、何らかの説明なしには考へられない。(註三) これこそ、Effertz の l'erreur fondamentale (Landry) であつて、これあるがために、生産力性と収益力性との背反の證明は全く其力を失ふのである。然し問題は少しも其意義を失つてゐない。たゞ何を以て生産力性となすべきかゞ解かるゝことなく、後進の研究家に残さるゝのである。それは財の量か、財の利用か、何らか適當に定義せられた費用を控除せられた利用の残かの問題、換言すれば何が經濟的厚生かの問題が残されるのである。ランドリーやビグーやローリアが Effertz から繼承した問題の主なるものゝ一つはこれである。

(註一) Landry, L'utilité sociale de la propriété individuelle, p. 259.

(註二) Ibid., p. 462. Cf. Analyse des antagonismes économiques faites par Simiand, dans l'Année sociologique, t. X, p. 519.

(註三) Ibid., p. 464.

ランドリーは此ほかに、収益力性から見て理想的なる生産量を示す m' 點が、生産力性から見て理想的なる生産量を示す m 點の右方ある場合が可能であるとの所説が重大なる誤であることを、指摘してゐる。「Effertz は(社會から見ての)過剰生産及び過少生産を説いてゐる。然し m 點が m' 點より右方にあり得るであらうか。社會的に見て最大生産量を示す m' 點は、使用價值と費用との差の最大なる生産量に相應する點である。實際には最大生産力性の點は、Effertz が考へてゐる點とは異なる。最大生産力性の點は

$$w \sqrt{a+b}$$

なる限りの點である。一財の生産費は、此財を得るために、得らるべきを失はなければならぬ財の利用の合計に他ならないから、此財の生産を出来るだけ多くするのがよい。但しより利用ある物を失はないことを條件として。 $w \sqrt{a+b}$ や $w \cdot (a+b)$ は關する所ではない。出来るだけ多くの財を生産すればよい。」(註) 此批評は、生産費をランドリーの如く解する限りに於ては、正當であらう。だが、Effertz の如くそれを一定せる客觀的量と考ふる場合には、此批評は妥當性を失はねばならぬ。但し(註)を如何なるものと考へねばならぬかは、また別の問題をなすのである。

(註) Landry, L'utilité sociale de la propriété individuelle, p. 470.